No.89
2020.7月1日発行

音楽で人とつながる

作曲家　三宅　悠太 氏（高校54期）

東京藝術大学作曲科をアカンサス音楽賞および同声会賞を受賞して卒業後、同大学院修士課程作曲専攻修了。奏楽堂日本歌曲コンクール第12回作曲部門第1位。第79回日本音楽コンクール作曲部門（オーケストラ作品）第1位、併せて岩谷賞（聴衆賞）および明治安田賞受賞。管弦楽、室内楽、舞台音楽、合唱、ほか多岐に渡る作編曲を手がける傍ら、全国各地より招聘され講習会講師やコンクール審査員等を務めている。近年では小中高の音楽科教科書に掲載される作編曲作品も多い。2016年第83回NHK全国学校音楽コンクール高等学校の部課題曲《次元》作曲者。聖心女子大学、都立総合芸術高等学校、各講師。日本音楽教育学会会員。

■立高時代

「授業は復習」とよく言われた立高での勉強と週3回のレッスン（作曲・ソルフェージュ・ピアノ）の両立で苦労したこと、合唱祭で完全燃焼したこと、演劇コンクールで劇音楽を作曲させてもらったこと、自由には責任が伴うことを実感したこと、思い詰まり真冬の海に一人で赴いたこと、命を見つめる日々の中シューベルトの音楽に救われたこと、そんな話を交わせる友人たちと出逢えたこと、他――「忘れられないこと」というのは日常的なものから特別なものまで案外沢山あるもので、枚挙に暇がない。その中から一つを此処に選ぶとしたら、感謝と共に瀬戸宏先生（立高OB）の音楽授業のことを書きたい。

先生は音楽学の専門家で、中世のグレゴリオ聖歌からジョン・ケージの現代音楽、Jazzの起源に至るまであらゆる時代の作品やその変遷について実に詳細に示してくださり、さらには西洋音楽の概念とは別次元のガムラン音楽の演奏実習までを授業で扱ってくださるという、実に豊かなものだった。当時の私はその素晴らしさを享受しきれていなかったと思うが、3年間の授業を通して自分が考えていた「音楽」という概念はいかに小さいものであったかを知った。先生の最終授業では「音楽とは」の話になり、授業の〆の言葉に深い感銘を受けたのだった――「3年間扱ってきたあらゆる音楽を通して私が皆さんに伝えたかったこと。それは、音楽は‘人と人が繋がっていくものである’ということです」――私はあの時、「音楽と一生関わっていきたい」と思った。

2020年2月《混声合唱とオーケストラのための「いのちへのオマージュ」》
初演（ゲネプロ時）/演奏：オーケストラ・アンサンブル金沢、合唱創造となみ合唱団

■現在

オーケストラ、室内楽、舞台音楽、合唱、ほか様々な作編曲に関わる「音楽を書く仕事」と、大学・高校の講師、各地での出張講習会やレッスンなど教育活動に関わる「音楽を教える仕事」の2つを、活動の軸としている。「書く仕事」は私の場合すべてがアコースティックなもので、それがプロが演奏する現代音楽であっても小学校の授業で歌われる教科書掲載曲あっても、デジタルの産物ではなく人間が命を吹き込むものゆえ演奏される毎に作品は新しく生まれ変わる。書いている時にはいつも、純粋な音楽のイメージと同時に音符の向こう側の演奏者や聴衆の存在を感じている。「教える仕事」は、音楽を享受する裾野を広げ、耕しつつ種を撒いてゆくような行為であり、それは同時に人間の多様性と向き合っていくことでもある。とりわけ近年は合唱作品を書く機会が増え、作曲者として立ち合う演奏の現場では詩や言葉について話を交わすシーンも多く、その人が抱えているものや歴史に心を向けることも自然になってきた。

――すべての仕事に共通していることは、‘人と直接関わる’仕事であるという点――そう、高校時代に音楽の最終授業で耳にしたあの言葉を思い出す。私は今も、音楽で人と繋がるということの意味を探し続けている。作曲家という仕事を通して自分にとっての新しい美しさを追究しながら、一生をかけて探し続けていきたいと思っている。